

ユニット型特別養護老人ホームの職員による環境評価と 空間に対する意識に関する研究 ～宮城県仙台市Tホームにおける事例考察～

石井研究室 三浦 夕加

キーワード：ユニットケア，入居後施設評価法（POE），
SD法，スタッフ，施設環境

1. 研究の背景と目的

2002年度から制度化され進められている居住系介護施設の個室ユニット化は、個別ケアの実践とともに利用者視点の施設環境づくり、暮らしの場としての居住環境の整備を目指す動きである。

これまで、居室化・ユニット化がもたらす影響とその価値は、利用者の住みこなしの様態、空間利用の実態調査、ユニット型施設におけるケアの様態などの調査から明らかにされ、知見が蓄積されてきた。

一方、ユニット型施設におけるユニットケアにおいては、居住環境を整えることと同時に、その空間の価値や意味を認識し、また意識しながら介護にあたることも重要であるとされている。ユニットケアが介護と環境とを両輪としながら実施されるものであり、その意味ではユニットケアにおいてはスタッフの空間の果たす役割についての対する意識と理解が必要不可欠である。

しかし、介護スタッフがどのような意識のもとで施設の空間を意識し、またケアの中で生かしているのかは、これまでほとんど明らかにされてこなかった。

本研究の目的は、介護スタッフの視点からのユニット型施設の空間の意味、その意識の変化を経時的な視点から探っていこうとするものである。特に今回調査対象とする施設（法人）は、空間に対するこだわりを持ち、またそれがケアにおいて重要な役割を果たすであろうとの確信から、施設を計画して運営している。その空間を現場のスタッフがどのように認識しているのかを、施設開設後から定期的に調査することで、その変化も捉えながら明らかにしようとするものである。

具体的には、入居後施設評価法（POE評価）、ユニット型特別養護老人ホームのケアにおける施設空間（建築）の役割や意味、ケアと空間（環境）との関わりをスタッフに対するアンケート調査によって明らかにする。本稿では、第1回目の調査の結果を報告する。

2. 調査方法と調査対象施設

仙台市にある特別養護老人ホームTホームのスタッフにアンケート調査（2013.12）を依頼し25名のスタッフから回答を得た。Tホームは同年10月に新規開所した施設で、10名の居住ユニットが10ユニットで構成される定員100名の施設である。

3. 調査対象者

回答者25人のうち男性が7人（28.0%）、女性が18人（72.0%）だった。20代が最も多く15人（60.0%）で続いて30代が8人（32.0%）だった。介護施設での勤務経験がない新規採用（新卒）が10人（40.0%）を占めた。

ユニット型施設での勤務が初めてのスタッフは19人（76.0%）だった。

スタッフの属性を考慮し、調査結果を性別、ユニット型施設での勤務経験有無別、従来型施設での勤務経験有無別で分析した。本稿では、ユニット型施設での勤務経験有無別での分析結果をもとに考察する。

4. 結果と考察

4.1 スタッフによるユニット内空間のPOE評価

ユニット内の入居後の利用評価としては、リビング、居室内洗面、居室内トイレ、浴室、脱衣・洗濯室、洗濯干し場等に関する指摘が多くあがった。

「居室内」では洗面の奥行きがなく、車イスのままシンクまで近づけない点、鏡が設置されていない点、手すりが極端に少ない点などがあげられた。「脱衣・洗濯室」では、脱衣室内に手すりが少ない点、また「洗濯干し場」に関しては、景色が良いので洗濯干場としての利用がもったいない、空調がないため乾かない、狭い、洗濯室から遠いなどの意見があげられた。

十分に議論して丁寧に計画・設計された施設であっても、実際の利用を通してさまざまな点が課題としてあがる。今後の施設計画における重要な知見が含まれていると考えられる。

4.2 勤務経験有無別にみたユニット内の環境の評価

「ユニット内の家具配置のケアにおける重要性の認識」については、ユニット型施設での勤務経験ありの人は「重要性をとて感じる」が80.0%に対して、ユニット型施設での勤務経験がない人は63.2%となっていた（表1）。

「個別ケアの実践への空間の影響力を感じるか」では、ユニット型施設での勤務経験なしのスコア（1.全く感じない～4.とても感じるまでの4段階評価）3.5に比べ、ユニット型施設での勤務経験ありのスコアは4.0であり、その重要性をより感じているスタッフが多い（表2）。

「利用者の居場所探し（づくり）に力を入れているか」では、ユニット型施設での勤務経験なしのスコアは3.16、ユニット型施設での勤務経験ありのスコアは3.67で、「かなりしている」と答えた割合が66.7%を占めた（表3）。

施設内の空間や居場所のあり方が「大きな意味を持っていると感じたケースがあるか」では、ユニット型施設での勤務経験なしのスコア 2.59 に比べ、ユニット型施設での勤務経験ありのスコア 3.67 という結果になり、大きな差があった。

事例としては、「リビングのソファや設えの設置によって、居室以外に自由に制限されず、入居者がゆっくりしている様子を多く見る事ができた」、「一日の中での居場所の選択を変えている入居者がいる」、「新聞を読む場所や書き物をする場所、お昼寝をする場所など、その時々でこだわりの場所がある」などがあげられた(表 4)。

「ケアの一要素として空間(物理環境やその要素)が果たす役割があると感じているか」では、ユニット型施設勤務経験なしのスコア 3.33 に比べ、経験ありのスコアは 4.0 と高く感じている割合が高かった。

4.3 労働環境としての施設環境の評価

労働環境として見たときの施設環境の評価を求めた。「職場の環境を誇りに思うか」では、ユニット型施設での勤務経験なしでは「誇りに思わない」人数が多い(10/19人)に対し、勤務経験ありでは「誇りに思う」人数が多い(5/6人)。

職場の物理的環境・労働環境は適切かどうかの評価では、ユニット型施設での勤務経験ありの方が、「適切と感じる」評価が多かった。

4.4 一個人としてみたときの施設の居住環境の評価

「将来、自分が老人ホームの選択をしなくてはならなくなった場合、自分もここに住んでもよいと感じるか」では、「十分そう感じる」が 4.2% (1人)、「どちらかと言えば感じる」という意見がもっとも多く 66.7% (16人)、「どちらかと言えば感じない」が 16.7% (4人)、「まったく感じない」が 12.5% (3人) だった。

4.5 ユニット内の共用空間における感覚評価

ユニット内の共用空間(リビング)を対となる形容詞により感覚によるイメージ評価(SD法、5段階評価)を求めた。その結果を図1に示す。全体的にユニット型施設勤務経験なしに比べ、ユニット型施設勤務経験ありの方が、施設の空間に対して住宅的、家庭的、穏やかで、親しみ、落ち着きのある空間だと評価している。

5. まとめ

施設の空間に対するスタッフ間での意識や関わり方の相違が明らかになった。施設での勤務経験、さらにはユニット型施設での勤務経験がその評価や意識には少なからず影響している。施設空間の利用、その中での利用者との関わりを通して、介護施設における空間環境の意味や役割を徐々に体験の中から理解していく様子が見える。

スタッフの空間に対する意識や関わり方が時間の経過、空間への慣れとともにどのように変化していくのか興味深い。今後の継続的な調査によって明らかにしていきたい。また、空間の質そのものを評価する手法として

表1 家具配置の重要性の認識

ユニット勤務経験	家具の配置の重要性				平均スコア
	1.まったく感じない	2.あまり感じない	3.少し感じる	4.とても感じる	
あり(5)	0	0	1(20.0%)	4(80.0%)	3.80
なし(19)	0	0	7(36.8%)	12(63.2%)	3.63
合計(24)	0	0	8(33.3%)	16(66.7%)	3.67

表2 個別ケアにおける空間の影響の実感

ユニット勤務経験	個別ケア実践における空間の影響の実感				平均スコア
	1.まったく感じない	2.あまり感じない	3.少し感じる	4.とても感じる	
あり(6)	0	0	0	6(100%)	4.00
なし(18)	0	1(5.6%)	7(38.9%)	10(55.6%)	3.50
合計(24)	0	1(4.2%)	7(29.2%)	16(66.7%)	3.63

表3 居場所探し(づくり)への注力

ユニット勤務経験	利用者の居場所探し(づくり)に力を入れているか				平均スコア
	1.まったくしていない	2.ほとんどしていない	3.少ししている	4.かなりしている	
あり(6)	0	0	2(33.3%)	4(66.7%)	3.67
なし(19)	0	1(5.3%)	14(73.7%)	4(21.1%)	3.16
合計(25)	0	1(4.0%)	16(64.0%)	8(32.0%)	3.28

表4 空間のあり方が利用者にも与える影響の実感

ユニット勤務経験	空間のあり方が利用者にとって大きな意味を持っていると感じたケースはあるか				平均スコア
	1.まったくない	2.あまりない	3.少しある	4.とてもある	
あり(6)	0	1(16.7%)	0	5(83.3%)	3.67
なし(17)	1(16.7%)	6(35.3%)	9(52.9%)	1(5.9%)	2.59
合計(23)	1(4.3%)	7(30.4%)	9(39.1%)	6(26.1%)	2.87

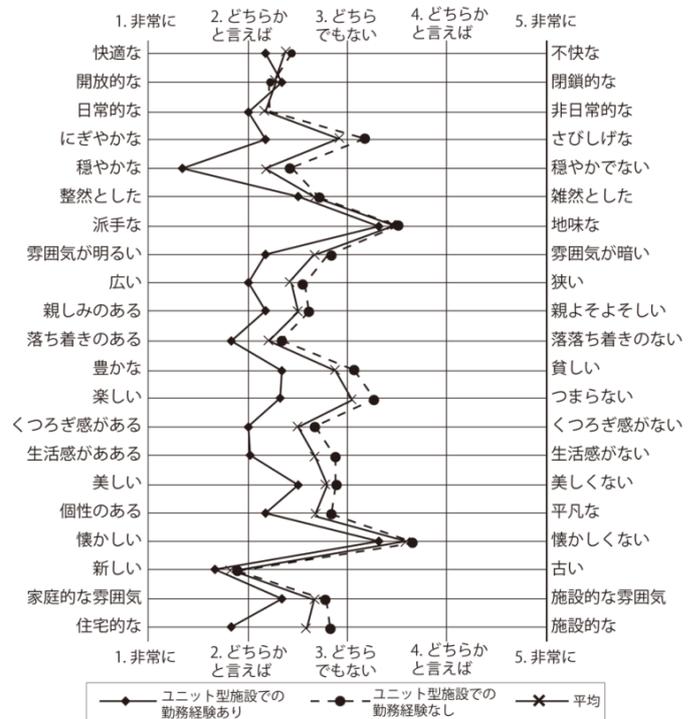


図1 ユニット内共用空間のイメージ評価

も、スタッフのとらえる空間像やそのとらえ方は活用できるものと考え、空間計画につながる知見もそこから得られるものと考えている。